

同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と松田甚次郎・宮澤賢治(2)

松田甚次郎と宮澤賢治との邂逅—その時代背景—



若尾 紀夫 (C昭39・院41)

前報(27)では、松田甚次郎(以下:甚次郎)と宮澤賢治(以下:賢治)との接点及び農学別科・第一拓殖訓練所について取り上げた。2人の略年譜を作成し対比考察した結果、甚次郎は生前の賢治を2回訪ね(注:前報の略年譜では4回とあるが2回に訂正)、また賢治が亡くなった後も花巻や盛岡等を頻繁に訪れていることが分かった。

本報では、甚次郎の盛岡高等農林学校農学別科入学までの略歴、甚次郎と賢治が出会った頃(大正15年~昭和2年)の時代背景について、特に重要と思われる2点「当時のイーハトーブにおける気象状況」及び「その当時賢治は何をしていたのか」を取り上げた。

盛岡高等農林学校農学別科入学までの松田甚次郎の略歴

松田甚次郎は、山形県最上郡稲舟村大字鳥越字駒場(現新庄市)の松田甚五郎の長男として生まれた(明治42年3月3日)。甚次郎は子どもの頃から特別人目をひく子ではなかったという(11)。

「先祖が鳥越館の家老格から帰農し、代々沼沢地を開拓しながら、多くの常雇人をおいて水田や山林を経営してきた家柄であり、甚五郎は鳥越信用組合を興し、村議・山林組合長・耕地整理組合長などをつとめる村きっての顔役であった(11)」。このように当時松田家は、自作兼地主の裕福な豪農であった。

甚次郎は新庄町立日新尋常高等小学校を卒業(大正12年3月)、山形県立村山農学校(旧北村山郡立農学校)に入学(大正12年4月)、同農学校を卒業(大正15年3月)後、大正15年4月に盛岡高等農林学校の農学別科で学ぶため初めて来盛し青春の1年を過ごした。

甚次郎がどのような動機で農学別科(27)に入学したのかは窺い知ることは出来ないが、後に述べるように、農学別科入学は甚次郎の「生涯を決定する

キーポイント」となったことは確かである。

大正15年4月に入学(9回生)した時の写真が残っている。入学生は21名で、その中には甚次郎及び親友である須田仲次郎が写っている(写真1)。後に登場する須田仲次郎は、秋田出身(秋田県由利郡象潟町:現・にかほ市)で、岩手大学農学部同窓会名簿(2002創立100周年記念)には、昭和58年8月1日に亡くなったとの記載がみられる。

甚次郎と賢治が出会った頃(大正15年前後)の時代背景—当時のイーハトーブにおける気象状況—

大正15年4月、賢治の母校である盛岡高等農林学校農学別科へ入学した甚次郎は、翌昭和2年に賢治と出会うことになるが、それは賢治が花巻農学校を依願退職して羅須地人協会を設立した頃であった。甚次郎と賢治との出会いには、当時(大正15年頃)の時代背景が関与していると思われる。そこで、先ずその頃の気象状況(旱害・冷害)について取り上げる。

「その後(大正二年)、この物語(注:グスコブドリの伝記)が世に出るキッカケとなった一九三一年(昭和六年)までの一八年間は冷害らしいもの「サムサノナツハオロオロアルキ」はなく気温の面ではかなり安定していた。むしろ暑い夏で「ヒデリノトキハナミダヲナガシ」=晴天続きで雨が少なく田圃に水がなくなり枯れていく水稲を見て、無念さから思わず涙する農民の姿=旱魃が多く発生している(19)。」

このように、大正2年は日本で気象観測が始まって以来の大冷害であり、その後、昭和6年の大冷害までの18年間は、むしろ旱魃の気候で冷害らしきものはなく気温の面では安定していた(19)。

*大正2年:気象観測始まって以来の大冷害

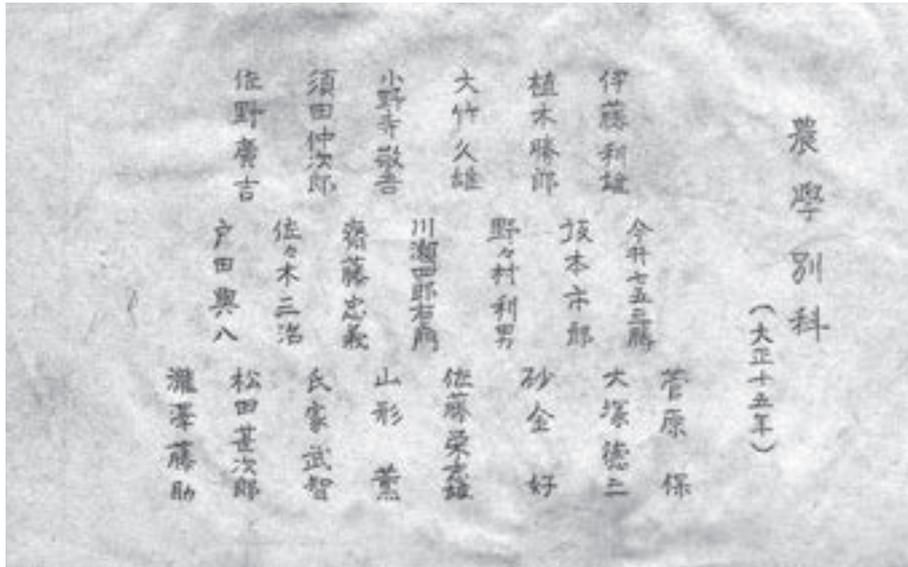


写真1 農学別科9回生の入学写真（大正15年4月）
松田甚次郎：下段左2人目、須田仲次郎：上段左2人目

- *大正13年：ヒデリの年・旱害
- *大正14年：ヒデリの年・旱害
- *大正15年：早魃が続き大凶作（旱害）となる。地元新聞紙上で、稗貫郡一帯の旱害「ヒデリによる凶作」の様子が連日報道された。
- *昭和2年：早魃・病虫害・水害等で水稻の被害が重なった（17）。この年は「多雨冷温の天候不順の冷夏で、未曾有の冷害凶作であった」との多くの記述がみられるが、その根拠が見当たらない。この年はむしろ早魃であった（26）。賢治はヒデリ対策・水稻の被害防除対策などを相談するために盛岡測候所の福井規矩三所長〔書簡231〕（13）や水沢緯度観測所をしばしば訪ねている。

盛岡測候所 福井規矩三宛て 書簡〔書簡231〕

昭和二年七月十九日 岩手県稗貫郡下根子
羅須地人協会

昨日はご多用のところいろいろご教示を賜はりまして寔に辱けなく存じます。お蔭様で本日は諸方に手配を定め茲両三日中には充分安全な処理を了へるかと思存されます。先づは虔んでお礼申し上げます。

昭和二年七月十九日

福井規矩三先生

宮沢賢治

- *昭和3年：7月半ばから8月末までの約40日間以上、少なくとも稗貫郡ではヒデリが続き農作物に大きな被害を与えた（26）。
- *昭和6年：岩手県を含む東北地方の農村は深刻な冷害に見舞われ大饑饉であった。その原

因はヤマセと呼ばれる寒冷風であった。賢治は岩手日報（昭和6年7月10日）に「本年稲作は平年作以下か：宮澤元花農教諭予想を発表 花巻地方の分蘖状況」を投稿している。

早魃・早害を報じた岩手日報の記事

[大正15年]

- * 当分雨は降らない 今年も空梅雨らしい 中央気象台観測（6月9日）
 - * 真夏のような暑さ 昨日は八十一度 盛岡測候所観測（6月9日）
 - * お天気つきで野菜は育たない（6月11日）
 - * 上田市営住宅も 井水渇水（6月12日）
 - * 太陽の黒点と暑さ寒さ この関係から今年は暑い（6月12日）
 - * 紫波赤石村（注1）では北上から引水 今尚約四百町歩が田植えができぬ状態（6月23日）(写真2)
- 注1：赤石村は昭和30年まで岩手県紫波郡にあった村で、現在の紫波町北日詰・南日詰・犬渕・桜町・平沢および日詰駅前にあたる。
- * 全く田植えができない 紫波と稗貫の一部 範囲は約一千町歩（6月23日）
 - * 東磐門村の稲田に亀裂 村民一同雨乞い（6月26日）
 - * 花巻地方の早害 植付け全く不能（6月28日）
 - * 西磐では三百町 遂に植付け不能（7月4日）
 - * 石鳥谷でやっと田植 北上から上水して（7月5日）
 - * 早魃から遂に死を企つ 不作の苦痛と之に伴う借財の為に（7月7日）
 - * 田植が出来ない所が一千町歩に及ぶ 紫波数ヶ村の悲惨事（7月8日）
 - * 紫波郡民が大挙して雨乞い（7月13日）
 - * 毎日酒や弁当持ちて水を揚げている 村人は灼熱地獄のなかで苦闘 紫波郡の植付不能地を観察して知事一行帰る（7月15日）
 - * 早害からこの惨状 泣きの涙で愛馬を売る（7月15日）



写真2 岩手日報（大正15年6月23日）

- * 意地の悪い雨 待ち焦がれて居る紫波地方には一滴も降らない（7月16日）
- * 打ちつゞく早害と紫波郡民の苦境（7月17日）
- * 県下の植付不能水田二千町歩に達せん（7月18日）
- * 灌漑用水に次いで飲料水も不足 言語に絶した紫波郡下（7月20日）
- * （花巻）稗和両郡下本年度のかん害反別は可成り広範囲にわたる模様（10月27日）
- * 収穫高の予想：減産（11月9日）
- * 村の子供達にやって下さい 紫波の早害羅災地へ人情味豊かな贈物（12月7日）
- * 紫波地方灌漑罹災者慰問義援金品募集 岩手日報社（12月9日）
- * 赤石村民大会を開く 早害救済策を決議（12月10日）
- * 赤石村民に同情集まる 東京の小学生からやさしい寄附（写真3）（12月15日）

本年未曾有の早害に遭遇した紫波郡赤石村地方の農民は日を経るに随ひ生活のどん底におちいつてゐるがその後各地方からぞくぞく同情あつまり世の情に罹災者はいづれも感涙してゐる数日前東京浅草区森下町済美小學校高等二年生高井政五郎君から河村赤石小學校長宛1通の書面が到達した文面に依ると、「わたし達のお友だちが今年お米が取れぬのでこまつてゐることをお母から聞きました、わたし達の學校で今度修學旅行をするのでしたのですがわたしは行けなかつたので、お小使の内から僅か三円だけお送り致します、不幸な人々のため、少しでも爲になつたらわたしの幸福です」と涙ぐましいほど真心をこめた手紙だつた。

- * 米のご飯をくはぬ赤石の小学生 大根めしをとる 哀れな人たち（12月22日）

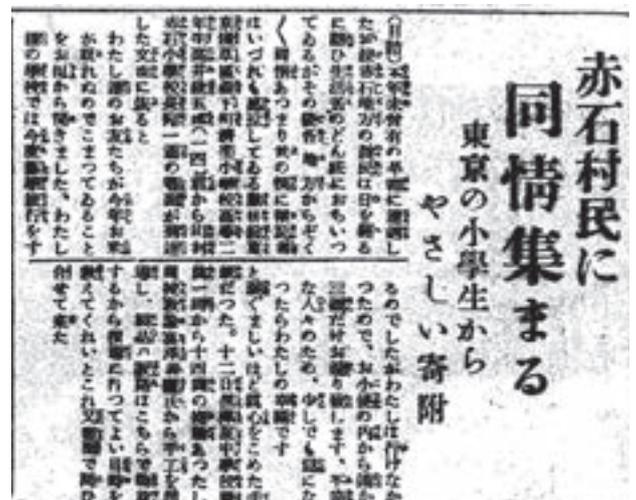


写真3 岩手日報（大正15年12月15日）



写真4 岩手日報（昭和2年1月9日）

* 旱害救済のため学生が炭売 県山林課で木炭を提供する（12月22日）

[昭和2年]

* 未だかつてなかつた紫波地方旱害惨状 飢に泣き寒さに慄ふ同胞 本社特派員調査の顛末発表（1月9日）（写真4）

* 赤石村に劣らぬ不動村の惨めさ 灌漑は全く徒勞に終つて 収穫は皆無（1月9日）（写真4）

注：大正15年の春盛岡にきた甚次郎は、大正15年及び昭和2年に新聞報道された旱魃・旱害の惨状をみて心痛め赤石村を慰問した。

[昭和3年]

* 四十日以上打ち続く日照りに陸稲始め野菜類全滅 大根などは全然発芽しない 悲惨な農村（8月25日）
昭和三年の七月半ばから約四十日間はヒデリが続き、盛岡を中心とする一帯（盛岡・花巻・稗貫郡）での陸稲は生育殆ど停止の状態にあり兩三日中に雨を見なければ陸稲作は全滅するものと縣農事試験場に於いて観測してゐる。

[昭和6年]

* 昭和前期における大冷害（原因はヤマセ）となる。

甚次郎と賢治が出会った頃（大正15年前後）の時代背景
—その当時賢治は何をしていたのか—

花巻農学校教師（大正10年12月3日～大正15年3月

31日）

賢治は、大正10年12月3日、稗貫郡立農学校教師（大正12年4月：県立花巻農学校）となり、大正15年3月31日に依願退職。4年4ヶ月の教師生活であった。

賢治の教師としての姿については数多く語られている（7, 12, 15, 16, 20）。賢治は作物（普通作物・農産製造）・肥料・土壌・英語・代数・化学・農業実習（農場実習・養蚕実習）など普通科目・農業科目の多くの教科を担当した（20）。その授業スタイルは独特で教科書をあまり使用しないで進められ、ユーモアと活気に満ちた授業であったという（20）。また賢治の教育活動は、絵画鑑賞や自作の演劇（植物医師・飢餓陣営・ボランの広場など）の上演、自作歌の合唱や楽器演奏など授業以外の野外活動にも及んだ。賢治が作詞（作曲 川村悟郎）した「精神歌」は花巻農学校々歌として歌い継がれている。

「この4ヶ年は、わたくしにとって、じつに愉快な明るいものでありました」（8）、「この4ヶ年がわたくしにどんなに楽しかったか わたくしは毎日を 鳥のやうに教室でうたってくらした 誓って云ふが わたくしはこの仕事で 疲れをおぼえたことはない」（9）と教師生活を回想している。

当時の花巻農学校は自由闊達な校風で各教師の授業の進め方は放任主義であったと言われるが、それは畠山栄一郎初代校長の豪快な性格によるものであった（20）。このような雰囲気のある農学校は、不羈奔放な賢治にとってはこの上なく恵まれた職場であり、その教師生活は楽しく充実したものであったという。

ところが賢治は、なぜか、突然教師を辞めて敢えてけわしいみちを歩んだ。退職するとき生徒たちや自分自身に向けて、詩「告別」を書いた（大正14年10月25日）（8）。教師を辞めて新しい未来に向って歩もうとする賢治の決意であろう。

云わなかつたが
おれは四月はもう学校に居ないのだ
恐らく暗くけはしいみちをあるくだらう

すこしぐらゐの仕事ができて
そいつに腰をかけているやうな
そんな多数をいちばんいやにおもふのだ

賢治は日頃生徒たちに「村に帰れ、農民になれ」と呼びかけたという。それは「農学校教育の目的は自営農民を育成することである」との賢治の考えに

よるものである。賢治は当時の農村の疲弊、農民の悲惨な実態を間近にみて、農民の生活を少しでも楽にし「農民の生活に寄り添いたい」との思いがあった。

教え子の富手一（大正11年3月卒業）（4）は、「先生はわたしたちにいつもいていました。学校を出たら家へ帰って百姓をやれ。なんどもなんどもいわれたのです。ところが学校をでるとたいていは技手になったり役所へつとめてしまう。それでは農村は立ち直れない、よくなると先生は思われていたのです。そういう自分が俸給生活者である矛盾から、おれも百姓になるからおまえらもなってくれ、という強い態度を示されたのだと思います。」と語っている。

このように生徒たちに対して「農民になれ」と教えながら、自らが安楽な教師生活を送っていることの矛盾。「百姓を指導するにはみずからも百姓をしなければならぬ」この自分の立場の矛盾と葛藤があった。その自己矛盾を解消するため、教師を辞めて自炊農耕の生活に身を投じたと推察される。

賢治は退職する1年も前（大正14年）に、教え子や級友・弟清六らに「来春はやめてもう本当の百姓になります」と教師辞職を伝えていることから、賢治は何時までも農学校に留まるつもりはなかった。

* 教え子松田浩一（大正14年3月卒業）の証言

先生は「教師はじめじめしていやだ。おれはやめることだが、家から逃げて桜さ移るから皆遊びにきてくれ」と言及している。（大正14年2月頃）（6, 23）

* 教え子杉山芳松（大正13年3月卒業）（樺太在住・王子事業所内）宛て書

「内地はいま非常な不景気です。・・仕事もずるぶ辛いでしょうが、どうかお身体を大切に若いうちにしっかりした人生の基礎をつくって下さい。わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけには行きませんから多分は来春はやめてもう本当の百姓になります。そして小さな農民劇団を利害なしに創ったりしたいと思ふのです。・・」と述べている。〔書簡205〕（大正14年4月13日）（13）

* 親友保阪嘉内（甲斐国）宛て書簡

「来春はわたくしも教師をやめて本当の百姓になって働きます いろいろな辛酸の中から青い蔬菜の穂やドロの木の閃きや何かを予期します わたくしも盛岡の頃とはずるぶん変ってゐます。・・」と心境を吐露している。〔書簡207〕（大正14年6月25日）（13）

* 齊藤貞一（和賀郡）宛て書簡

「あなたもご病気がすっかり快くおなりでほんたうに結構です。・・わたくしも来春は教師をやめて本当の百姓になります。百合も咲き鳥も流れる夏の盛りになりました。」と書いている。〔書簡208〕（大正14年6月27日）（13）

* 宮沢清六宛て書簡

「すぐご返事するのですがこの頃畠山校長（注：畠山栄一郎）が転任して新しい校長（注：中野新左久）が来たり私も義理でやめなければならなくなったりいろいろごたごたがあったものですからつい遅くなったのです。〔書簡214〕（大正14年12月1日）（13）

* 森佐一宛て書簡

「お手紙ありがとうございました。学校をやめて今日で四日木を伐ったり木を植えたり病院の花壇（4）をつくったりしてゐました。もう厭でもなんでも村で働かなければならなくなりました。東京へその前ちょっとでも出たいのですがどうなりますか。〔書簡218〕（大正15年4月4日）（13）

「本当の百姓」になる。花巻農学校教師時代、賢治の「農」への思いは「灰の中の炭火」のように秘かにくすぶり続けていた。やがて、それが火種になり、農学校教師の辞任と羅須地人協会設立へと踏み出すことになる。ところが、十分な時間があったにも関わらず、辞任後の用意周到な準備や具体的な計画はみられず、成り行きで突如辞めてしまった感は否めない（22）。

佐々木（21）は、賢治の農学校辞任の背景には、もっと現実的な別の原因があると指摘している。「大正4年11月畠山校長が転出し、後任の中野新左久校長が几帳面な性格で、今でいう教育指導要領に則った教育方針をとることになり、それ迄の賢治の自由奔放な授業を継続困難になったことが直接の原因となって、大正15年3月をもって辞任するに至った。」としている。

この校長交代という職場の事情、「いろいろごたごたがあり農学校に居づらくなった」ことが、突然の依願退職を促した主因の一つであり、宮沢清六宛て手紙〔書簡214〕は、そのことを裏付けしている。そのためか本来行われるはずの退任式もなかったという事実が頷ける。

ここからは、花巻農学校時代と羅須地人協会時代での主な出来事や活動について紹介する。

最愛の妹トシ子の死（大正11年11月27日）

賢治が生涯を通じて最も悲しんだ出来事が起った。下根子桜の別宅で療養中のトシ子が若干24歳で永眠した。妹の死は賢治にとって大きな衝撃であった。賢治の「深い悲しみ」は、当日に詠った「無声慟哭（永訣の朝・松の針・無声慟哭）」の作品に刻まれている。翌年には、賢治は青森から北海道に渡り樺太方面に傷心旅行に出かけ、「青森挽歌」・「宗谷挽歌」・「オホーツク挽歌」「噴火湾（ノクターン）」などを詠う（4, 6, 8）。

トシ子が亡くなった日は、外ではみぞれがびしょびしょ降っていた寒い日であった。賢治は押入れに頭をつっこみ「トシ子、トシ子」と慟哭したという。賢治の悲嘆の心を詠った作品「永訣の朝」を、長くなるがここで紹介しよう。

「永訣の朝」

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

（あめゆじゆとてちてけんじや）

うすあかくいつさう陰惨な雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

（あめゆじゆとてちてけんじや）

青い蓴菜のもやうのついた

これらふたつのかけた陶碗に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

（あめゆじゆとてちてけんじや）

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにすすんでいくから

（あめゆじゆとてちてけんじや）

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽、気圏などよばれたせかいの

そらからおちた雪のさいごのひとわんを…

…ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな二相系をたち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ

みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

（Ora Orade Shitori egumo）

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのとざされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらぼうにも

あんまりどこもまつしろなのだ

あんなおそろしいみだれたそらから

このうつくしい雪がきたのだ

（うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあよにうまれてくる）

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまこころからいのる

どうかこれが天上のアイスクリームになつて

おまへとみんなとに聖い資糧をもたらずやうに

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

岩手県国民高等学校（大正15年1月～3月）

大正15年1月15日、花巻農学校に国民高等学校が開設された。国民高等学校は疲弊した農村をどのようにして更生するか、農村の救済と農村指導者の養成などを目的としてデンマークの国民高等学校を模範に設置された（6, 20）。

岩手県では2、3ヶ月の短期間に農村指導者の養成及び農村文化農民芸術の建設の目的で開校した。県から主任として高野一司（修身農村問題を担当）が生徒の指導監督にあたり、また多くの著名な講師が講義を行った（18, 20）。生徒は特に資格を限定せず20名くらいであるが、農学校出身者・農村の青年・篤農家など各村の優秀な者が多かった（18, 20）。

花巻農学校では教師が囑託となって講義を受け持ち、賢治も講師を兼任して、1月30日から3月23日に渡って、11回の講義を行ない農業科学や芸術概論を教えた。同修了式は3月27日。花巻農学校での開講は最初で最後であった。

前半5回は「トルストイの芸術批判」「最初の酒造」「われらの詩歌」「水稻に関する詩歌」「稲と露」「宅地設計」などを講じ、6回以降は「農民と云わず地人と称し、芸術と云はず創造と云い度いたいののである。」と述べ、「我等は一緒にこれから何を論ずるか」

「世界全体幸福にならないうち、一人の幸福はあり得ない」「われらは世界のまことの幸福を索ねよう。求道すでに道である」と「農民芸術概論」を講義した(6)。農学校では生徒たちも受講した。この「農民芸術概論」の講義をもとに、大正15年6月頃、羅須地人協会の講義用題材として「農民芸術概論綱要」が起稿された。

一括して「農民芸術概論」と呼ばれるものは、「農民芸術概論」(章題と各章の内容を一行で示したものの)、「農民芸術概論綱要」(各章の内容を細かく記したものの)、「農民芸術の興隆」(第一章の内容を細かく記したものの)の3項からなり(8)、羅須地人協会設立の支柱になったと言われる(6)。

「農民芸術概論」・「農民芸術概論綱要」・「農民芸術の興隆」の解釈については多くの先人が取り上げている(6, 12, 23)。以下「農民芸術概論」の内容とその一部である序論を紹介しよう(14)。

「序論/ われらはいっしょにこれから何を論ずるか/ 農民芸術の興隆/ 何故われらの芸術がいま起らねばならないか/ 農民芸術の本質/ 何がわれらの芸術の心臓をなすものであるか/ 農民芸術の分野/ どんな工合にそれが分類され得るか/ 農民芸術の諸主義/ それらのなかにどんな主張が可能であるか/ 農民芸術の製作/ いかに着手しいかに進んで行ったらいいか/ 農民芸術の産者/ われらのなかで芸術家とはどういふことを意味するか/ 農民芸術の批評/ 正しい評価や鑑賞はまづいかにしてなされるか/ 農民芸術の総合/ おお朋だちよ/ いっしょに正しい力を併せわれらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの大きな第四次元の芸術に創りあげようではないか/ 結論/ われらに要るものは銀河を包む透명한意志 大きな力と熱である」

序論

…われらはいっしょにこれから何を論ずるか…
 おれたちはみな農民である ずるぶ忙がしく仕事もつらい
 もっと明るく生き生きと生活する道を見付けたい
 われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった
 近代科学の実証と求道者たちの実験と
 われらの直観の一致に於て論じたい
 世界がぜんたい幸福にならないうちは
 個人の幸福はあり得ない
 自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
 この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは

銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう

求道すでに道である

花巻農学校から羅須地人協会へ

大正15年3月31日、賢治は花巻農学校を依願退職し、4月1日から下根子桜の別宅に移り独居自炊生活を始めた。別宅近くにある北上川岸の荒地を独りで開墾耕作し、トマト・キャベツ・ジャガイモ・白菜・セロリ・パセリ・アスパラガス・メロンなどの野菜果物、ヒヤシンス・チューリップ・グラジオラスなどの草花を栽培した(6, 22, 26)。

岩手日報(大正15年4月1日)の記事「新しい農村の建設に努力する」(写真5)には、後に設立される羅須地人協会の素描とも思われる趣旨が語られている。

「花巻川口町宮澤政次郎長男賢治(二八)氏は今回県立花巻農学校の教諭を辞職し花巻川口町下根子に同士二十余名と新しき農村の建設に努力することになった。きのふ宮沢氏を訪ねると現代の農村はたしかに経済的にも種々行きつまつてゐるやうに考へられます。そこで少し東京と仙台の大学あたりで自分の不足であった『農村経済』について少し研究したいと思つてゐます。そして半年ぐらゐはこの花巻で耕作にも従事し生活即ち芸術の生がいを送りたいものです、そこで幻燈会の如きはまい週のやうに開さいするし、レコードコンサートも月一回位もよほしたいとおもつてゐます。幸同志の方が二十名ばかりありますので自分がひたいにあせした努力でつく



写真5 新しい農村の建設に努力する
 岩手日報(大正15年4月1日)

りあげた農作物の物々交換をおこないしづかな生活を つづけて行く考えです」と語ってゐた、氏は盛中卒業後盛岡高等農林学校に入学し同校を優等で卒業したまじめな人格者である」

羅須地人協会の設立

羅須地人協会は、大正15年8月23日、旧盆の中日(旧暦7月16日)に設立され、この日を農民祭日と定めた(6)。しかしその設立には現実的根拠がないとも言われる(20)。最初の定期集会は、大正15年12月1日に催され、農学校の教え子・国民高等学校参加者・部落の青年・篤農家たちに稲の栽培法・科学・農民芸術論などを講義した。翌2日には上京し、タイプライター・オルガン・エスペラントの講習を受け、また上野図書館に通い劇の研究なども行った。同月29日に帰花した。

また近郊の村々に「無料肥料設計相談所」を開設して稲作指導や肥料設計の相談に応じ、処方された肥料設計書は2,000枚以上とも言われる(6,7)。

大正15年11月22日に羅須地人協会設立の案内状をだしている(4,6,7)。羅須地人協会には特に細かい会則や会費はなく、また入会資格もなく働く農民であれば誰でも良いという。地人協会では、持ち寄り競売・レコード交換会・レコード鑑賞・オーケストラ・農民劇・農民音楽が計画された。

「おれたちはみな農民である ずるぶん忙がしく仕事もつらい もつと明るく生き生きと生活する道を見付けたい」「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」「われらは世界のまことの幸福を索ねよう」このような賢治の理想と使命感が、羅須地人協会の設立と活動の根底にある。

「羅須地人協会設立の案内状」

- 一、今年は何も悪く、お互ひ思ふやうに仕事も進みませんでした。いづれ、明暗は交替し、新しい、歳も来ませうから、農業全体に大きな希望を載せて、次の支度にかかりませう。
- 二、就て、定期の集りを、十二月一日の午後一時から四時まで、協会で開きます。日も短しどなたもまだ忙がしいのですから、お出でならば必ず一時までにねがひます。辨当をもってきて、こちでたべるもいいでせう。
- 三、その節次のことをやります。豫めご準備ください。
 冬期製作品分担の協議
 製作品、種苗等交換売買の豫約
 新入会員に就ての協議
 持寄競売・本、絵葉書、楽器、レコード、農具 不要のもの何でも出して下さい。安



写真6 農村文化の創造に努む
岩手日報(昭和2年2月1日)

かつたら引っ込ませるだけでせう。

- 四、今年は何もなくて、学校らしいことはできません。けれども希望の方もありますので、まづ次のことをやってみます。

十一月二十九日午前九時から

われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学をわれわれのものにできるか 一時間
 われわれに必要な化学の骨組み 二時間
 働いてゐる人ならば、誰でも教へてよこしてください。

- 五、それではご健闘を祈ります。 宮沢賢治

岩手日報(昭和2年2月1日)(写真6)には、「農村文化の創造に努む」という見出しで、羅須地人協会の設立の趣旨や活動が具体的に報じられている。

「花巻川口町の町会議員であり且つ同町の素封家の宮沢政次郎氏長男賢治氏は、今度花巻在住の青年三十余名とともに羅須地人協会を組織し、あらたなる農村文化の創造に努力することになった。地人協会の趣旨は現代の悪弊と見るべき都会文化に対抗し農民の一大復興運動を起こすのが主眼で、同志をして田園生活の愉快を一層味わはしめ原始人の自然生活にたち返らうというのである。

これがため毎年収穫時には彼等同志が場所と日時を定め耕作に依つて得た収穫物を互ひに持寄り有無相通する所謂物々交換の制度を取り、更に農民劇、農民音楽を創設して協会員は家族団らんの生活を続けて行くにあるというのである。

目下農民劇第一回の試演として今秋“ボランの広場”六幕物を上演すべく夫々準備を進めてゐるが、これと同時に協会全員全部でオーケストラを組織し、毎月二、三回づゝ慰安デーを催す計画で、羅須

地人協会の創設は確かに我が農村文化の発達上大なる期待がかけられ、識者間の注目を惹いてゐる。(写真宮沢氏。氏は盛中を経て高農を卒業し昨年三月まで花巻農学校で教鞭を取つてゐた人)

羅須地人協会「農民講座」

賢治は羅須地人協会に「農民講座」を設け、大正15年11月29日から翌年3月中、農業に必要な科学や化学的知識を説いた。

講義案内には「農業ニ必須ナ化学ノ基礎、土壤学要綱、植物生理学要綱上・下、肥料学要綱上・下、エスペラント、地人芸術概論。午前十時ヨリ午後三時マデ 時間厳守 資格ヲ問ハズ 参観モ歓迎 昼食御持参」とある(6, 14)。

下根子桜から豊沢町へ：羅須地人協会の撤退

- * 昭和2年11月：チエロ勉強のために上京し3ヶ月間滞京
- * 昭和3年1月：粗食による栄養不足と過労のため体調を崩して帰花
- * 昭和3年6月：伊豆大島旅行に出かける [書簡235-238] (13)。
 - 6月7日：花巻出発、仙台で東北産業博覧会及び東北大学を見学
 - 6月8日：水戸着、偕楽園及び農事試験場を見学、夕方東京着
 - 6月12日：大島へ向け出航(一泊)
 - 6月13日：伊藤兄妹を訪問、三原三部を書く。
 - 6月14日：大島から東京に戻る。在京中、帝国図書館・農林省・特許局・西ヶ原農事試験場に行き、更に新橋演舞場・筑地小劇場・市村座・本郷座・明治座・歌舞伎座で観劇。帰花する迄の賢治の行動はかなりの強行日程であった(10, 24)。
 - 6月24日：帰花

昭和3年8月に入り、強行な大島旅行での疲労が蓄積、更に帰花後稲作不良のため風雨の中を東奔西走して体を酷使したため発熱し肋膜炎をおこし、昭和3年8月10日に豊沢町の実家に戻り療養生活に入る。12月に急性肺炎をわずらい発熱する。

豊沢町に戻ってから、賢治は下根子桜には戻ることはなかった(26)。ここに羅須地人協会は、わずか2年で自然消滅することになる(大正15年8月16日～昭和3年8月10日)(4)。その様子は賢治自身が沢里武治宛てた手紙[書簡243](13)に記されている。

沢里武治宛て 封書(昭和3年9月23日)[書簡243]

岩手県立師範学校寄宿舎内 高橋武治様

お手紙ありがたく拝見しました。八月十日から丁度四十日の間熱と汗に苦しみました、やっと昨日(注：9月22日)起きて湯にも入り、すっかりすがすがしくなりました。六月中東京へ出て(注1)毎夜三四時間しか睡らず疲れたままで、七月畑へ出たり村を歩いたり、だんだん無理が重なってこんなことになつたのです。演習(注2)が終るころはまた根子へ戻って今度は主に書く方へかかります。休命中二度もお訪ね下さったさうでまことに済みませんでした。豊沢町に居ることを黒板に書いて置けばよかつたときりに考へました。こんど出るときは大體葉書を出してください。学校ももう少いでせうがオルガンなどやる暇もありますか。

高橋武治様 九月廿三日 宮沢賢治

注1：伊豆大島旅行(昭和3年6月7日～24日)

注2：後述の「陸軍特別大演習と盛岡高等農林学校」を参照

賢治は昭和3年の暮れに急性肺炎になり、冬を越すことが出来ないと自分自身で覚悟していた。[書簡245・246](13)

[書簡245]：高橋慶吾宛て封書(昭和3年12月21日)

・この頃又もや三十八(注：℃)に逆戻り致し床中乱筆御免被成下度候

[書簡246]：宛て先不明(下書)(昭和3年12月)

・この度の自ら招いた病気に就てもいろいろとご心配下さいまして何とお礼の申しあげやもございません。何分神経性の突発的な病状でございましたためこの8月までもこの冬は越せないものと覚悟いた。

羅須地人協会の休止と撤退の背景

岩手日報の記事「農村文化の創造に努む」(昭和2年2月1日)で羅須地人協会の設立の趣旨が報じられた(写真6)。その中の「あらたなる農村文化の創造」「農民の一大復興運動を起こす」との表現が危険思想とみなされ、賢治は社会主義運動との関係を疑われて花巻警察署にマークされ警察に呼ばれ事情聴取を受けたという。賢治は協会関係者に累の及ぶことを恐れたため、オーケストラを一時解散し集会も不定期になった(25)。

3月頃から羅須地人協会は、集会や楽団を解散し講義活動等を取りやめ、休止状態になりその社会性を失ってゆく。しかし、その後も賢治は個人的に農業指導を続けた。その一つとして無料肥料設計相談所を設け、「農民への稲作指導・肥料設計」に活動

の重点が移っていった。

先に述べたが、賢治は過労による発熱と肋膜炎のため、昭和3年8月10日、下根子桜から豊沢町に戻り年末まで自宅病臥していた。この下根子桜からの撤退は「病氣」が原因であると広く認知されてきたが、別の原因もあると言われる。

「労農党（労働農民党）」（注1）は大正15年3月に結党された合法左派無産政党内で、「農村の救済」を緊急政策としていた。賢治は「農民を貧困からどのようにして救済できるのか」との思いを持ち、社会主義や労農運動に無関心ではなかった。賢治は労農党のシンパ（賛同者）となり、労農党稗和支部に出入りし、いろいろな面で便宜（賢治の世話による党事務所の開所、謄写版の寄附、金20円カンパなど）をはかったという（11, 25, 26）。

昭和3年10月初頭、陸軍特別大演習統監のため天皇陛下が岩手県に行幸。それに伴い県内でも社会主義者・無産者の厳しい取調べ、いわゆる荒ましい「アカ狩り」が行われた。羅須地人協会及び賢治自身もその対象となった。そのため賢治は陸軍特別大演習が終わる頃まで下根子桜から距離をおいて実家に戻りひっそりと謹慎・蟄居していたという。賢治が下根子桜から撤退したのは「病氣」も関係しているが、

むしろ「陸軍特別大演習」に伴う「アカ狩り」によるものであるという。〔書簡243〕（13, 26）

注1：「労農党（労働農民党）」は合法左派無産政党内で、大正15年3月に結党されたが、日本共産党の外郭団体とみなされて解散命令（昭和3年4月）を受けた。昭和4年11月に結成され昭和6年7月まで存続した無産政党内「（新）労農党」と区別して、「旧労農党」又は略称「労農党」として知られている。

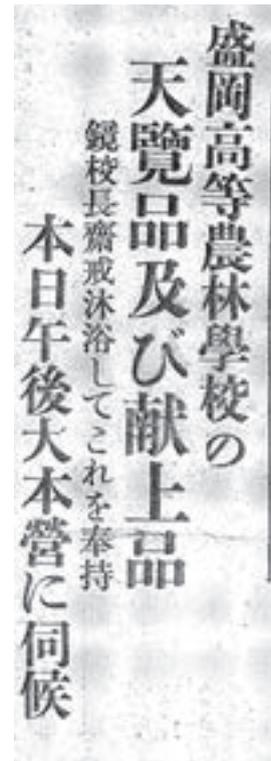


写真8 鏡保之介校長等大本營に伺う（10月7日） 岩手日報（昭和3年10月8日）



写真7 天皇陛下東京を出発し盛岡に向う（昭和3年10月4日） 岩手日報（昭和3年10月5日）



写真9 天皇陛下盛岡高等農林学校に臨幸（10月9日） 岩手日報（昭和3年10月10日）



写真10 本校に行幸された天皇陛下（昭和3年10月9日）
本館（現農業教育資料館）前での御奉迎（左）と御奉送（右）

陸軍特別大演習と盛岡高等農林学校

賢治が沢里武治宛て〔書簡243〕で「演習」と書いているのは、昭和3年10月6日から8日まで岩手県下で行われた「陸軍特別大演習」のことである（1, 2, 3, 5）。

5日：「陸軍特別大演習」の大本営は盛岡市内丸の県公会堂に置かれ、天皇陛下は演習前日の五日午後二時廿分に演習統監のため本県に行幸（写真7）。盛岡高等農林学校の代表として鏡保之介校長と上村勝爾教授が盛岡駅プラットホームで奉迎

6日：稗貫郡花巻日居城野で演習が大々的に行われ天皇陛下が統監、野立が行われた。同日大本営にて県下重要物産及び農民生活資料を天覧

7日午前：紫波郡日詰方面に行幸し大演習を統監。梨本宮殿下が盛岡高等農林学校に台覧

7日午後：鏡保之介校長及び教授達（上村勝爾・門前弘多・進士織平・富樫浩吾・安田貞雄・村松舜祐・岩田久敬・小野寺伊勢之助・三浦二郎・内田繁太郎・小西 要・菊地賢次郎）は大本営に伺い、陳列された盛岡高等農林学校の天覧品（自然科学研究業績）について説明した（写真8）。各功労者に拝謁。岩手県産著名高山植物二十種の腊葉標本二十点・東北地方産竹九新種の腊葉標本二十五点・馬匹年齢鑑定用馬歯実物標本十点（写真14）を天皇陛下に献上

8日：岩手郡観武ヶ原附近にて大演習を統監

9日午後1時：天皇陛下が盛岡高等農林学校に行幸（写真9・10）。鏡保之介校長が天覧品（写真11・12・13）を説明され、有資格者五百余名に賜饌（本校運動場を充用）（写真15）があり、本校職員二十三名も賜饌の光栄に浴した。多数の宮殿下が天皇非常立退所（注：県公会堂大本営の予備）に指



写真11 本館2階講堂に陳列された天覧品



写真12 本館2階講堂に陳列された天覧品



写真13 鏡保之助校長が天皇陛下に説明されている様子

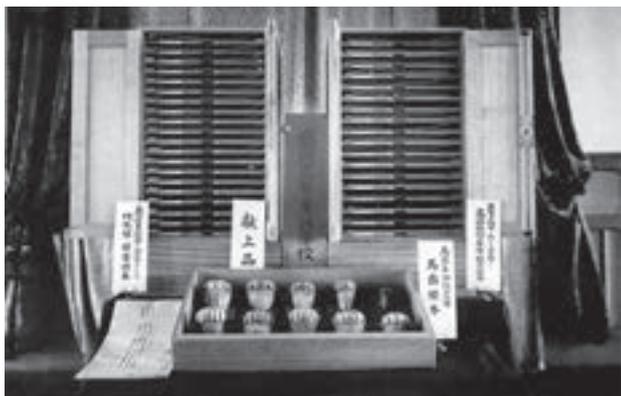


写真14 献上品（三種）



写真15 御賜饌（御饗饌場：本校運動場）



写真16 非常立退所に指定された記念会館
（現百年記念館）

定された記念会館（現百年記念館）（写真16）の階上で休息された。

10日午前：大本営前にて御親閲拝受、盛岡高農生徒を含む一万二千有余人が参列した。

10日午後：零時四十分盛岡駅御発輦、天皇陛下帰京された。盛岡出発前に菊花御紋章付銀製花瓶一個（写真17：農業教育資料館で展示中）が盛岡高等農林学校に下賜された。

注：写真10～写真15・17は天皇陛下行幸記念写真帳（昭和3年10月）及び感激（1）から引用



写真17 御下賜菊花御紋章付銀花瓶

校友会報 第51号（昭和3年12月20日）に当時の記録が見られる。

- ・ 9月29日：学校長 特別大演習挙行せらるゝに当り一同に訓示を為す
- ・ 10月3日：午後二時より第一講堂（注：本館二階）に於て献上品並に天覧品の消毒と修祓式を挙行し大本営に搬入陳列
- ・ 10月5日：聖上陛下午後二時半 盛岡御着を全教職員学生 盛岡駅前に御奉迎
- ・ 10月6日：記録なし（注：花巻日居城野で演習と野立）
- ・ 10月7日：記録なし（注：大本営で盛岡高農の天覧品について鏡保之介校長及び教授達が説明）
- ・ 10月7日：全校生徒花巻日詰方面に陸軍特別大演習観戦
- ・ 10月8日：全校生徒花巻日詰方面に陸軍特別大演習観戦
- ・ 10月9日：記録なし（注：天皇陛下 盛岡高農に行幸・御賜饌）
- ・ 10月10日：聖上陛下午後零時四十分 盛岡御発輦 教職員生徒 盛岡駅に御奉送
- ・ 10月10日：午後二時校長御真影奉戴を職員生徒一同校門に御奉迎
- ・ 10月11日：午前十時第一講堂に於て御真影拝戴式挙行
- ・ 10月11日：第一講堂に於て午後一時より御下賜金伝達式挙行

甚次郎と賢治との出合いは、甚次郎が農学別科で学ぶため偶然盛岡に来たことによるが、そこには本報で取り上げた歴史的背景が関係していると思われる。当時（大正15年～昭和2年）イーハトーブは大

早魃で農村農民は悲惨な状況にあり、盛岡に来た甚次郎はその現実に直面し心を痛めたこと。賢治が花巻農学校を依願退職して羅須地人協会を設立した時期に、甚次郎が賢治を訪問したこと。この2点である。

昭和2年3月8日、農学別科修業をひかえた甚次郎は、花巻を訪れて賢治に面会した。甚次郎は、賢治から「小作人たれ」「農民劇をやれ」と激励されて、郷里山形新庄に帰り自ら小作人となり、賢治の思想精神を実践し農村指導者として短い生涯を駆け抜けることになる。今回はその時の状況について報告する。

参考資料

- 1) 感激：鏡保之介（昭和5年元旦起稿）
 - 2) 盛岡農林専門学校回顧（昭和26年2月）
 - 3) 岩手県史 第10巻：岩手県、杜陵印刷、879（昭和40年8月）
 - 4) 年譜 宮沢賢治伝：堀尾青史、図書新聞社、101/203/232-237（昭和41年3月）
 - 5) 岩手大学農学部七十五年史、246-249（昭和54年7月）
 - 6) 宮沢賢治—地人への道—：佐藤 成、川嶋印刷、133-138/186-239/275-311/392（昭和59年10月）
 - 7) 宮沢賢治の五十二箇月—教師としての賢治像—：佐藤 成、川嶋印刷（昭和61年1月）
 - 8) 宮沢賢治全集1、ちくま文庫、539-542/156-159（昭和61年2月）
 - 9) 宮沢賢治全集2、ちくま文庫、299（昭和61年4月）
 - 10) 宮沢賢治一年表作家読本—：山内 修、河出書房新社、155（平成1年9月）
 - 11) 「賢治精神」の実践—松田甚次郎の共働村塾—：安藤玉治、農文協、36-41/46（平成4年7月）
 - 12) 宮沢賢治から〈宮沢賢治〉へ：佐藤道雅、学藝書林（平成5年11月）
 - 13) 宮沢賢治全集9、ちくま文庫（平成7年3月）
 - 14) 宮沢賢治全集10、ちくま文庫（平成7年5月）
 - 15) 宮澤賢治物語：関登久也、学習研究社（平成7年12月）
 - 16) 宮沢賢治：佐藤隆房、桜地人館（平成8年3月）
 - 17) 宮澤賢治外伝：佐藤 成、でくのぼう出版、234（平成8年12月）
 - 18) 広がりゆく賢治世界—19世紀から21世紀へ—：宮沢賢治イーハトーブ館、77（平成9年8月）
 - 19) ヤマセと冷害：ト藏建治、成山堂書店、15（平成13年7月）
 - 20) 私の賢治散歩（上巻）：菊地忠二、75-90/245-293（平成18年3月）
 - 21) 宮沢賢治小私考—賢治「農聖伝説」考（承前1）：佐々木多喜雄、北農 75（1）、69-84（平成20年1月）
 - 22) 宮沢賢治小私考—賢治「農聖伝説」考（承前2）：佐々木多喜雄、北農 75（2）、163-174（平成20年4月）
 - 23) 宮沢賢治小私考—賢治「農聖伝説」考（承前4）：佐々木多喜雄、北農 75（4）、331-341（平成20年10月）
 - 24) 宮沢賢治小私考—賢治「農聖伝説」考（承前5）：佐々木多喜雄、北農 76（1）、91-107（平成21年1月）
 - 25) 塔建つるもの—宮沢賢治の信仰—：理崎 啓、哲山堂、159-162（平成29年11月）
 - 26) 本統の賢治と本当の露：鈴木 守、51-90（平成31年4月）
 - 27) 北水会報 第141号（令和3年8月）
-
- 北水会報 第141号に掲載した略年譜の訂正
- *松田甚次郎の略年譜
- ・昭和2年2月1日 花巻下根子桜に賢治を訪問する（初回）を削除
 - ・昭和2年3月8日 ・・（2回）を（1回目）とする。
 - ・昭和2年8月8日 ・・（3回）を（2回目）とする。
 - ・昭和3年 不明 花巻に賢治を訪問する（4回目）を削除
- *宮澤賢治の略年譜
- ・大正15年12月2日 「チェロを持って」「チェロの練習」を削除
 - ・昭和2年2月1日 集会は不定期になる（下根子桜から撤退を削除）
 - ・昭和3年8月10日 過労により発熱し自宅療養、羅須地人協会撤退